

無藤委員からの意見

【「達成度テスト（発展レベル）」について】

○目的として、「主体的に学び考える力」を重視するのはよいが、「主たる目的」と言い切るのは無理がある。測定すべき能力にあるように、教科の基礎的・基本的な知識・技能も、「達成度テスト(基礎レベル)」で見られるものより高い水準のものが多くあり、それをとらえる必要もあるのではないだろうか。



## 達成度テスト（発展レベル）（仮称）の考え方について（案）への意見

明治大学副学長 勝 悦子

○達成度テスト（基礎レベル）は現在高等学校教育部会で議論されており、基本的には、その導入には賛成である。基礎レベルテストの導入を卒業および大学入学の要件とすることは、大学で学ぶ学力を保証し、高等学校での生徒の学びのインセンティブとなる。

○達成度テスト（発展レベル）については、複数回の実施、対象学年の前倒しなど、既存のセンター試験を大きく変える形での改編には賛成できない。こうした激変は、高等学校の教育内容を変えるのみならず、高校生の生活を大きく縛ることになる。

○既存のセンター試験や一般入試が、知識量を中心とした筆記試験の点数で一点刻みの激しい競争になっているとの批判が、その導入のひとつの論点となっているが、すでに行われているセンター試験も、知識量だけでなく、「主体的に学び考える力」等の能力を測る問題も多く含まれている。国立大学二次試験や私立大学の入試でも、論述の問題やマークシートであってもこれら能力を測る問題は多い。何より、膨大な知識、考える力を測られるために多くの勉強をしなければならないことは、高等学校学習の強いインセンティブとなっている。

○また、入試に対応するため目標をたててやり遂げる、という作業には、様々な能力が必要であり、選別制の高い大学での現状の入試でも、これら能力は、結果として測られているだろう。したがって、発展レベルテストの内容については、既存のセンター試験の内容を大きく変えるものにする必要はないのではないか。むしろ、発展レベルテストを大きく変えるのではなく、これらを含めた多様な資料、評価方法の導入、志望動機などのアプリケーションの充実などがより重要であると考えます。

○就職において、面接や大学名だけではなく（情報の非対称性があるなか、大学名は学生を選別する有効な手立てとなっている）、ラーニングアウトカムや学修成果が重視されるようになれば、日本の大学の教育内容は大きく変わり、結果として現在のような、ネームで決まる、日本の大学のヒエラルキーを変えていくだろう。ひいては、教員の意識も変わり、教育・研究の強化により、世界の大学に伍していくことに繋がるだろう。

○発展レベルテストの導入の趣旨として、「大学教育の質的転換の促進（大学における主体的な学びへの移行）」とあるが、当該テストの導入だけで大学教育の質的転換が促進されるわけではない。前述したように、社会との接続部分が変わっていけば、人材育成という面での健全な大学間競争を促進することになり、大学教育は大きく変わっていくだろう。こうしたことが大学自体の評価に繋がっていくことが確認されれば、「主体的に学び考える力」のある学生を入れる必要性が改めて認識され、各大学のアドミッションポリシーのもとで、入試方法はそれぞれの大学の機能に合わせて主体的に変わっていき、それに伴い、高校の教育も質的に転換するだろう。

○このように、発展レベルテストは現状のセンター試験と大きく変える必要はないと考えるが、試験の方法については、科目の整理、素点を標準偏差にするなど、さらに改善していくことが必要である。また合科目型、総合型の導入も検討に値する。とはいっても、基礎科目の能力を測ることが最重要である。

○グローバル人材育成の観点からは、英語能力は必要不可欠である。4技能を測る試験に変えること、あるいは TOEFL の導入に置き換えれば、初等教育、中等教育における英語の教育方法は劇的に変わるだろう。

以上

文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会御中

リクルート進学総研所長  
リクルートカレッジマネジメント編集長  
小林浩

第13回高大接続特別部会に欠席したため、以下の通り意見表明をさせていただきます。

<資料2>

**高大接続特別部会の審議の経過について（素案）**

**7. 高等学校教育と大学教育の連携強化**

**（大学入学前の準備教育等）**

- ・ 高校教育の必修科目については、高校時代に完了すべきである。
- ・ その実現に向けて、達成度テスト（基礎レベル）の内容や高校までの教育を未来志向で検討していく必要がある。
- ・ 現実的に行われている大学で高校段階の復習的な補充教育が行われていることが理解している。しかし、この状況を変えるために、高大接続部会で検討を進めているはずである。
- ・ 大学入学後の補充教育について報告書に盛り込むのであれば、「在り方」のところではなく、「高大接続・大学入学者選抜を巡る現状と課題」の章に記載すべきだと考える

<資料3>

**達成度テスト（発展レベル）のあり方について**

**3. 4. 達成度テスト（発展レベル）で測定すべき能力・内容について**

- ・ 「合科目型」や「総合型」の導入については賛成であるが、その場合、達成度テスト（基礎レベル）において、高校時代に修得すべき必修科目の質が担保できていることが前提となる。
- ・ そのうえで、さらに各大学や学部で必要な知識・技能があるのであれば、各大学の個別試験において追加に必要な教科の試験を実施すればよいと考えられる。
- ・ そのためにも、アドミッションポリシーで、各大学や学部において入学までに身に付けておくべき能力を、受験生にわかるように明示することが重要である。

以上



## 1 達成度テスト(発展レベル)の在り方

達成度テスト(発展レベル)については、「これからの大学教育を受けるために必要な能力について、高校段階までの学習内容を踏まえながら、幅広く判定するもの」とし、これまでの審議の過程で明らかになった現行の大学入学者選抜の課題を解決する新しい制度となるよう取り組むことが必要である。

## 2 達成度テスト(発展レベル)の実施方法及び試験結果の取扱

- 各大学のアドミッションポリシーに基づく個別試験を充実させることが重要であり、達成度テスト(発展レベル)の試験結果については、目標に準拠した段階別で示すとともに、各大学は、達成度テスト(発展レベル)の結果をその大学が求める一定の学力水準に達しているかどうかを判定するような資格試験的に取り扱うことが必要である。
- 受験機会を複数化することにより、一発勝負的で、再挑戦の機会がない現行制度を改善し、志願者が本来の実力を発揮できるようにすることが必要である。
- 受験機会を複数化するに当たっては、各大学が達成度テスト(発展レベル)において求める学力水準を段階別として予め示し、1回目の試験結果が志願者に速やかに提供されることにより、志望校が示す段階に達している志願者は2回目の達成度テストを受験する必要性が少なくなることから、テスト実施に係る負担や志願者の負担が軽減されるものと考えられる。
- 目標に準拠した段階別表示と資格試験的取扱とすることにより、異なる試験内容の受験者を対象とした入学者選抜の公平性が確保されるものと考えられる。
- 外部試験等で代替する場合、点数化することの困難性も考えられ、目標に準拠した段階別表示とすることにより、選抜の公平性の確保が図られるものと考えられる。

## 3 各大学が個別に実施する試験の充実に向けた支援など

- 大学の入学者選抜に係る労力が増加し、本来の研究・教育に支障をきたしているなどの課題も指摘されている中、大学が志願者を多面的・総合的に評価する丁寧な選抜を実施するためには、各大学が個別に実施する試験において活用できる試験問題を大学入試センターが作成・蓄積できるよう、大学入試センターの機能を拡充することについても検討することが必要である。
- 大学・高校双方の労力の省力化・効率化を図るため、インターネット出願や調査書の電子化に向けた検討を進めることが必要である。そのことにより、大学は、より豊富な情報を迅速に入手できるとともに、情報を編集することにより、効果的な選抜資料の作成が期待できる。

#### 4 「合科型」「総合型」試験の検討に当たって

現行の学習指導要領においても、各教科・科目についての相互の関連を図り、発展的・系統的な指導ができるようにすることが示されているところであり、「合科型」「総合型」を導入することにより、こうした授業展開がより促進され、高等学校教育の質の向上も期待できるものと考えられる。その導入に当たっては、学校現場への影響を十分考慮して検討することが必要である。

#### 5 その他

達成度テスト（発展レベル）は、高校教育はもとより、小学校、中学校等の教育活動にも大きな影響を与えるものである。新たな試験制度の導入に当たっては、学習指導要領の見直しはもとより、教員の指導力向上、学校の指導体制の充実などについても併せて検討し、学校教育への信頼がより一層高まるよう取り組むことが必要である。

## 垂水委員からの意見

### 転学部・転学科と退学・留年

学部の学科別募集のように小さな専門別に募集すれば、入学後に初めてその専門に不向きがわかることもある。その場合、他の学部・学科への転学部・転学科の柔軟性が必要である。細かい単位で募集し合格者を決めている場合、入試での受験科目や、合格者最低得点との絡みで転学部・転学科が難しくなる場合も多い。本人に不向きな専門を4年間も続けることは学生にとっては苦痛であろうし、自分に向いたものへの転身として退学も選択肢として考えてもよからう。

入学後にこのような問題を起さないよう、大学側にはAPの明確化、学部・学科の教育内容の理解してもらう努力が必要であるし、募集単位をできるだけ大きくくり化することも考えてもらいたい。

### 複数回実施と難易度調整

基礎レベルでも、発展レベルでも複数回実施となると、その間の難易度の調整が不可欠となる。現在のセンター試験では理科の科目間と地歴・公民の科目間で点差が開いた時に得点調整が行われている。同じ受験者集団で、複数回実施の期日が近い場合はこの方法も使えるかもしれない。しかし、受験者集団が異なる前年度との比較となると、これも難しく、項目反応理論（IRT）を用いた難易度調整が考えられる。

IRTを使うためには大問形式から、小問形式へと問題の作り方が変わるとともに、難易度を調査するために、本試験で使う前に問題を一般の目にさらすことになる。問題自身は非公開としても、調査した者から情報が広がることは避けられない。

将来的には、達成度テスト（発展レベル）も、IRT等の難易度調整を考慮したCBTを利用した年複数回受験可能な制度に持っていきたいが、一般入試で数年後に一気に実現することは現実的には難しいと思われる。当面は達成度テスト（基礎レベル）等で複数回実施と難易度調整を実施し、経験を積み、問題点を探ることが必要であろう。



「高大接続特別部会の審議の経過について（素案）」等に関する意見

土井真一

「高大接続特別部会の審議の経過について（素案）」及び「達成度テスト（発展レベル）（仮称）の考え方について（案）」に関して、以下の通り、意見を述べます。

### 1. 資料2「5 大学入学者選抜の改善」について

大学教育の質的転換に資する大学入学者選抜とするために、大学入学志願者の能力・意欲・適性を多面的に評価することは適当であると考えられる。

ただ、大学は公教育機関であり、とりわけ国公立大学は、その運営について国民・住民に対して説明責任を負い、また憲法第14条第1項の法の下での平等をはじめとして、憲法の基本的人権規定を遵守する義務を負う。したがって、国公立大学の入学者選抜は、志願者の「思想及び良心の自由」や「信教の自由」等に不当に干渉することなく、公平かつ公正に行われなければならない、志願者に対して均等な機会を保障する必要がある。

大学入学者選抜の改革に際しては、この点について十分な配慮が行われるよう、より明確に指摘すべきであると考えます。

### 2. 資料3「2 テストの目的」及び「4 試験の内容」について

大学入学者選抜のための新たな試験として、「達成度テスト（発展レベル）（仮称）」は重要な意義を有すると考えるが、「2 テストの目的」にも記載されているように、大学教育を受けるために必要な能力を評価、判定するための重要な一部に留まる。

したがって、「達成度テスト（発展レベル）（仮称）」の検討に際しては、他の評価・判定方法との関係を整理することが重要である。とりわけ各大学が実施する個別学力試験との関係については、十分に調整を図るよう指摘するのが適切ではないかと考える。

### 3. 今後の検討等について

大学入学者選抜試験を受験するまでには、小学校、中学校及び高等学校における12年間の学習の積み重ねが存在しており、それをゆるがせにすることはできない。また、教育改革が所期のねらい通りに適切に実施されるためには、その趣旨が広く理解され、実施に向けた準備が十分に行われる必要がある。とりわけ、大学入学者選抜の改革は大きな影響を与えることから、12年間の学校教育を通じた人間形成や能力育成の重みを踏まえ、入学者選抜試験を受験する子どもたちの立場にも十分に配慮したうえで、慎重かつ着実に今後の検討を進めていただきたい。



## 意見書

### 資料2について

- 1) (7頁) GPA についての記述の中で、厳格な成績評価として「優」の比率上限についての記載があるが、従来型成績評価が相対的評価を行っているためにこのような記述がなされていると思われるが、アウトカム評価はあくまで絶対評価で行われるのが原則であり (GPA はその代表例)、このままの記述では意図が誤って伝わらないか
- 2) (7頁) 大学全体としての共通の評価に関する「考え方や尺度 (アセスメント・ポリシー) の確立」は「方針 (アセスメントポリシー) や測定・評価方法の確立」とした方がわかりやすいのではないか
- 3) (8頁) 入学者受入方針 (アドミッション・ポリシー) について  
教育課程と入学者選抜で評価・判定するものとの関係性や、入学志願者に求める能力とその評価の方法についても明確化することについては、「望ましい」ではなく「必要である」と改めた方がいいのではないか。
- 4) (8頁) (様々な学習成果、活動歴を評価する枠組みの整備) の記載の中で、「大学入学志願者の能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価するための方策として、外国語検定をはじめとする各種の資格・検定試験の成績等」に加え、「大学等で取得した単位や成績」を加えると、高大接続 (AP 等) を促進することになっていいのではないか
- 5) (9頁) 大学入学者選抜において、「国際バカロレア資格やその成績を活用する取組も推進すべきである」との記載については、現在 AP について中韓両国での利用状況を調査しているが、韓国や中国では AP や IB を国内の大学進学のための材料として活用していないと思われる。あくまで、海外留学希望者のためのものとして活用されている。このあたりの記述は慎重に取り扱うべきであろう。中韓で AP を大学進学準備のためにめざしている高校や生徒はソウル大や北京大学の進学準備教育とは別トラックの学修内容で学習していた。スーパーグローバルハイスクール相当高校が力を入れているのが現状である。
- 6) (9頁) 「早期の合格者の決定は、高等学校教育に好ましくない影響を与えることも指摘されており、合格発表期日についても一定のルールを設けることが必要である」という記載については、AO 入試や推薦入試だけでなく、一般入試における大学入学者選抜要項における実施日の遵守がなされていないことについても警告すべきではないだろうか。
- 7) (12頁) 「自らの判断で受け入れた学生に対し、必要な場合には、教育課程外の活動として高等学校段階での学習内容の復習的なものを含む補充教育などの取組を行うことも重要である」とされているが、「高等学校段階での」は「高校段階までの」という方が現実的であるが、「復習的なものを含む補充教育」というより「確認や復習をする学習機会の提供」という表現の方が妥当ではないか。「補充教育」は「高校から大学への基礎学習面での円滑な移行を図る」といったほうがよくないか

### 資料3について

- 1) (1頁)「試験の内容」の表現については、「高等学校における各教科を融合した内容を取り入れた合科目型や、教科型の試験では評価できない能力を測る総合型の導入について検討する」という記述については、方向性については理解できるが、現段階で実現可能性や内容についての共通理解が十分共有されていない段階であると思われるので、「の実現可能性について検討する」という方がいいのではないか
- 2) (1頁)「成績提供方法」について「素点のほか、段階別や標準化点数、百分位等による提供について検討する」と書かれているが、100点満点での評価が難しいテストになるニュアンスを明確に伝えるべきではないか

平成26年3月13日

濱名 篤